

深川市

0335 前田 直輝

1. 深川市の概要

深川市は北海道のほぼ中央に位置する市であり、道内有数の稲作地帯である。札幌市を中心とする道央圏と旭川市を中心とする道北圏、留萌市を中心とする留萌圏を結ぶ交通の要衝として古くから発展してきたこの町は、1市5町で構成される北空知圏の中核都市であり、行政、経済、医療などの各種施設、機関が集積している。

表 1 深川市のシンボル		
深川市の木 しらかば	しらかばは、山野に自生し、生命力が極めて強く、また材は緻密で堅く実用性が高い。白色の樹皮に覆われているその姿は美しく、北国独得の素朴な風情を表わし、風雪に耐え、清楚にして大空に雄々しく伸びるさまは、本市の限りなき発展を象徴している。	 画像元:Yahoo!検索
深川市の花 菊	菊は、気品高く、誠実、信用などの意味を持つ。その高貴にして優雅な姿を愛する人が多く、古くから全市的に植栽されており、その輝くばかりに咲き匂うさまは、本市の限りない躍進を象徴している。	 画像元:Yahoo!検索
深川市の鳥 かっこう	かっこうは、ほととぎす科の夏鳥で初夏の頃に山麓や平原地帯を訪れる。かっこうの鳴き声が聞かれる時期になれば、どの作物を植付けてもよいという古くからの伝えもあるほど市民に深く親しまれている。初夏をつげるのどかな鳴き声は、田園都市深川にふさわしく、本市永久の平和を象徴している。	 画像元:Yahoo!検索

また、深川市の市章は、深川市の「フ」と「カ」を組み合わせ意匠化したもので、悠久の平和と市民の融和、市勢の発展を表している。

深川市の地名の由来は域内を流れる大鳳川（アイヌ語「オオホ・ナイ」）の意識「深い・川」とする説がある。大鳳川とは、北海道深川市の標高約130mの丘陵地に発し、多数の支川と合流しながら、秩父別町を貫流し妹背牛町で雨竜川に注ぐ幹流路延長17.8km 流域面積88.2平方kmの石狩川の二次支川である。

図1 深川市の市章



出典:各県の県章

2. 深川市の歴史

2.1 開拓以前の深川市

本州から開拓使が来る以前の深川では、アイヌ人が石狩川の岸辺を中心に住んでいた。アイヌ人は、地面に柱を立て、木の皮で作った縄や、ブドウ・コクワの蔓などで横木を縛って屋根を組み、壁や屋根には、ササ・ヨシ・木の皮を使って家を建てていた。家の中は、部屋が一つだけで、真ん中にイロリを作り、回りの床には乾いた草などを敷きつめ、その上にカヤやヨシで編んだ簾、更に、その上にガマやスゲで編んだゴザを敷いていた。また、一つの集落（コタン）は5～6軒くらいであった。

2.2 開拓以降の深川地区

1892年（明治25年2月4日）には、深川村が誕生した。開拓は冬期間に木を切り倒し、雪解けを待って刈り取った雑草に火をつけて野焼きを行い、その後を鍬で掘り起こすという大変な作業であった。木の少ない土地では、ブラオを付けた馬で掘り起こす者もいた。

1875年（明治9年）、はじめて琴似村（現札幌市）に入植して以後、次々と屯田兵が入植してきた。深川地区には、1895年（明治28年）、一已に200戸、納内に100戸、翌年も同数が入植した。

1895年（明治28年）には鉄道を作るための測量が始められ、3年後の1898年（明治31年）開通した。空知太^{そらちぶと}から旭川までの鉄道の開通と同時に、深川駅と納内駅が開業し、それまで寂しかった深川市街が急ににぎやかになった。特に、駅前には多くの家が建ち、膨れ上がるような活性化を果たした。鉄道が開通するまでは、滝川や旭川に行くには石狩川を渡って上川道路を通って行かなければならず、多くの時間と、荷物を運搬するための多額の費用がかかった。しかし、鉄道が開通してからは安い料金で早く移動したり物を運搬できるようになり大変便利になった。その後、1910年（明治43年）には深川～留萌まで

の留萌線、1941 年（昭和 16 年）には深川～名寄までの深名線が完成し、深川市は交通の中心となった。

1954 年（昭和 29 年）、深川町、一已村、納内村、音江村の 4 町村を合併し市を作ろうという話が持ち上がった。その後の 1963 年（昭和 38 年）、4 町村の合意ができ、深川市が誕生した。日本で 555 番目、北海道で 28 番目の市である。1970 年（昭和 45 年）、隣接の多度志町を合併し、ますます大きな市になった。その後、隣接の多度志町の合併や、公共施設や道路、橋等の整備を行い深川市は大きく発展してきた。1992 年（平成 4 年）には、開基 100 年・市制施行 30 年を記念し、記念施設として生きがい文化センターが建設された。

2.3 米作りへの挑戦

開拓当時、北海道に入植した屯田兵は米を食べたいという思いの高まりから稲の栽培を始めた。しかし、寒冷な気候のためうまく育たなかったり、水不足で田が乾いたり、水害で稲を流されるなど失敗の連続であった。

深川では、1892 年（明治 25 年）、音江で稲を植えたところうまく育ち、また、稲を植えることを禁止されていた一已^{いちやん}の屯田兵の一人が 1896 年（明治 29 年）に稲の栽培に成功した。当時は屯田兵には稲の栽培を禁じられていたが、1897 年（明治 30 年）頃からは米を自由に作れるようになった。

やがて米の生産が軌道に乗り始めると、米作りをしたいという人が多くなり、水がなくて畑しか作れない人たちは何とかして水を引いてきて水田を作りたいと考えた。1901（明治 41 年）年、一已の屯田兵の代表と、深川の菊亭農場の代表が大きな用水路を作る計画を立てたが多額の資金を要するため諦めざるを得なかった。1909 年（明治 42 年）、石狩川の水を引くための土功組合をつくり用水路を作ることとなった。

1912 年（大正元年）、用水路の工事が始められ 4 年後の 1916 年（大正 5 年）完成した。納内地区や一已地区では、神居古潭の上流から用水路を作ることとしたが、岩をくり抜き石狩川の下にトンネルを掘るという大工事であった。こうして、各地区に用水路が出来上がり畑はだんだん水田に変わっていった。

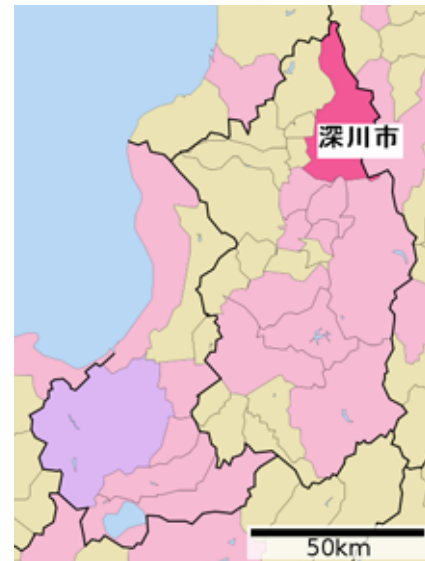
今日、深川市が道内有数の稲作地域として、また、良質良食味米の生産地として高い評価を受けているのは、こうした先人の苦労と努力によるものである。

3. 深川市の地理・気候

3.1 深川市の地理

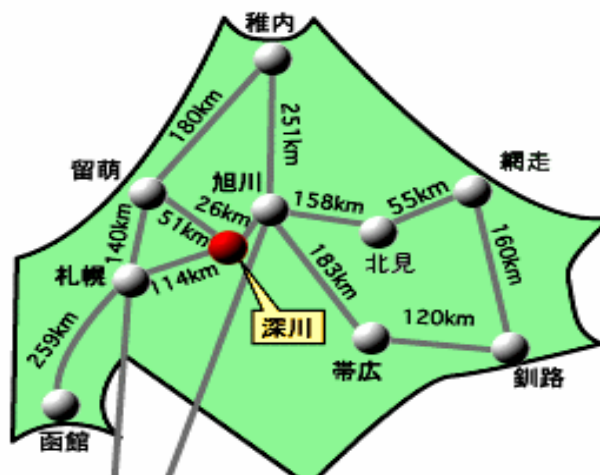
石狩平野の最北部に位置する深川市は、南部を除く三方を山に囲まれている。市中心部を東西に石狩川が流れ、その周辺に水田が広がる。また北部の山間部を雨竜川が南流してくるが、市域の平野部には殆ど入らないまま西へ抜ける。空知地方北部の交通の要所で、多くの鉄道・道路が集積する。

図2 深川市の位置



出典:Wikipedia（一部編集）

図3 北海道内に見る深川市の位置

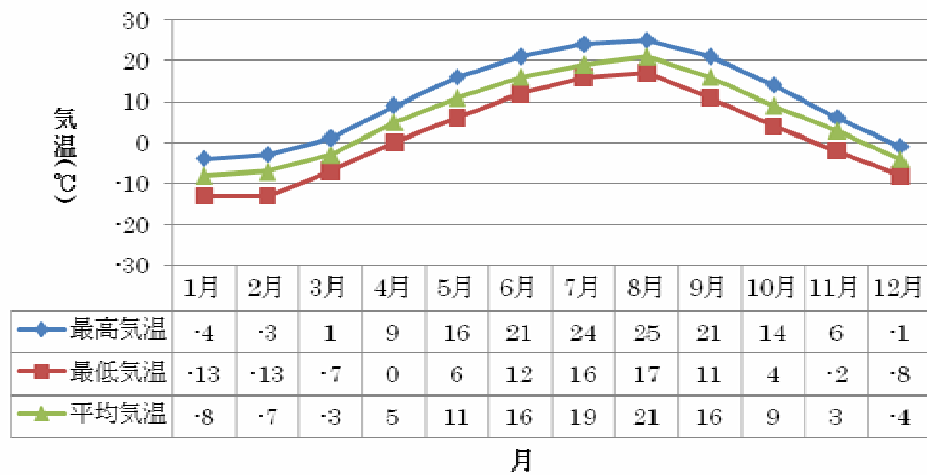


出典:深川市 HP

3.2 深川市の気候

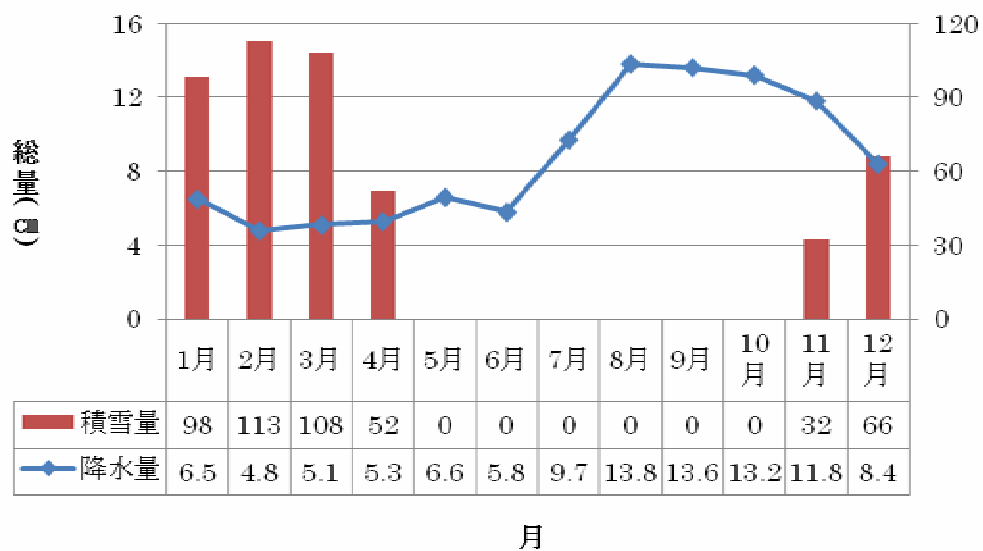
深川市の気候は、やや内陸的で北海道各都市の中では中ようを示し、四季の移り変わりを体感することができる。平年値で最高気温は8月上旬の25.3度、最低気温は2月上旬の零下13.0度で、年間の平均気温は6.4度。また、最深積雪は113cmである。年間の気温の寒暖差が激しく、8月から11月にかけての降水量が多いという特徴がある。冬には最深積雪量が1mを越す程の降雪量を誇るのも特徴の一つである。また、この気候は低農薬米や野菜・果樹の生産など、深川市の農業において一役買っている。

グラフ1 深川市の気温



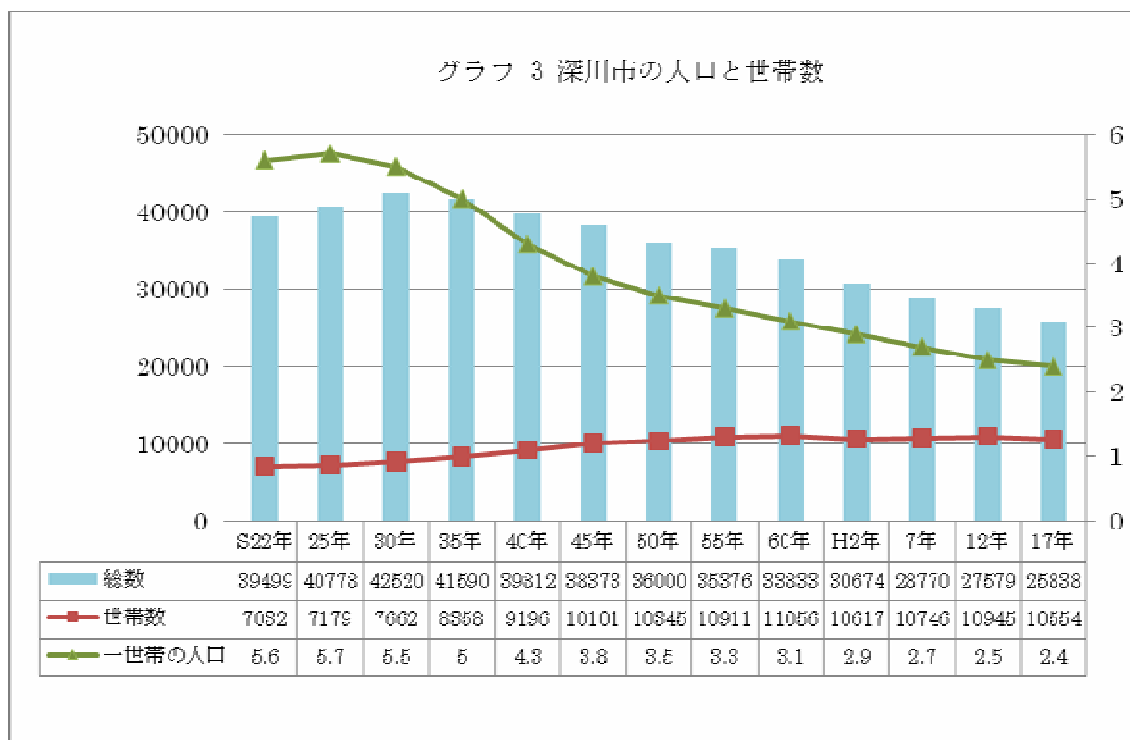
資料:深川市 HP

グラフ2 深川市の降水量と最深積雪量



資料:深川市 HP

4. 深川市の人口



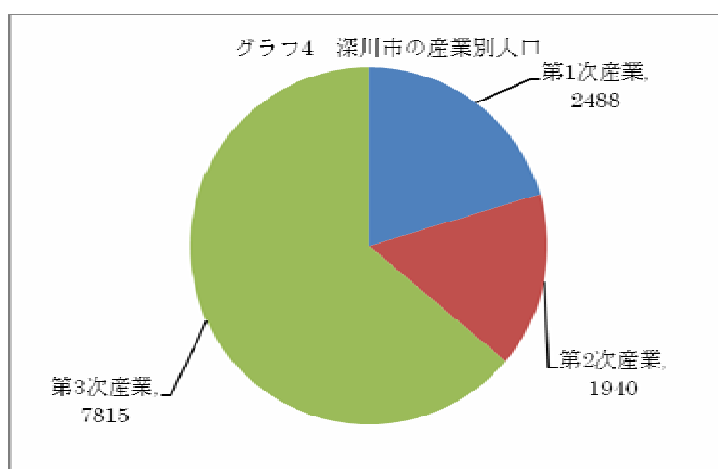
資料:深川市 HP

深川市の人口は、1955 年(昭和 30 年)を機に減少傾向へと転じ、現在までその傾向は続いている。また、人口の男女比は殆ど無かったが、昭和の後期から徐々に差が開き始めている。その一方で、深川市の世帯数は増加し、減少傾向に転ずることなく横這いの状態になっている。また、深川市における一世帯当たりの人口は 1950 年(昭和 25 年)から一貫して減少していることから深川市では核家族化が進み、それに伴い人口も減少したものと考えられる。

5. 深川市の産業別人口

深川市の 15 歳以上の就業者を産業別に分けると、第 3 次産業の比率が高く、第 1 次産業と第 2 次産業の割合がほぼ同じであることがわかる。

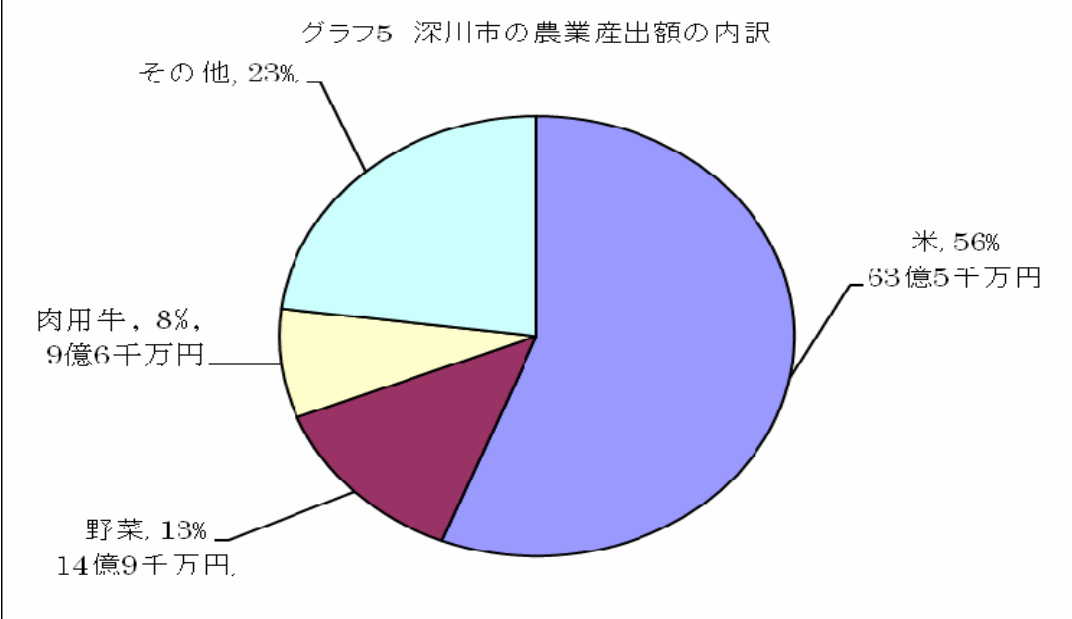
第 1 次産業において、高い割合を占めるのは農業であり、これは深川市が米所であることから



資料:平成 17 年国勢調査報告書

も窺い知ることができる。また、第 2 次産業では建設業の割合が高く、第 3 次産業では卸売・小売業、サービス業の割合が高い。

6. 深川市の農業



出典:農林水産省

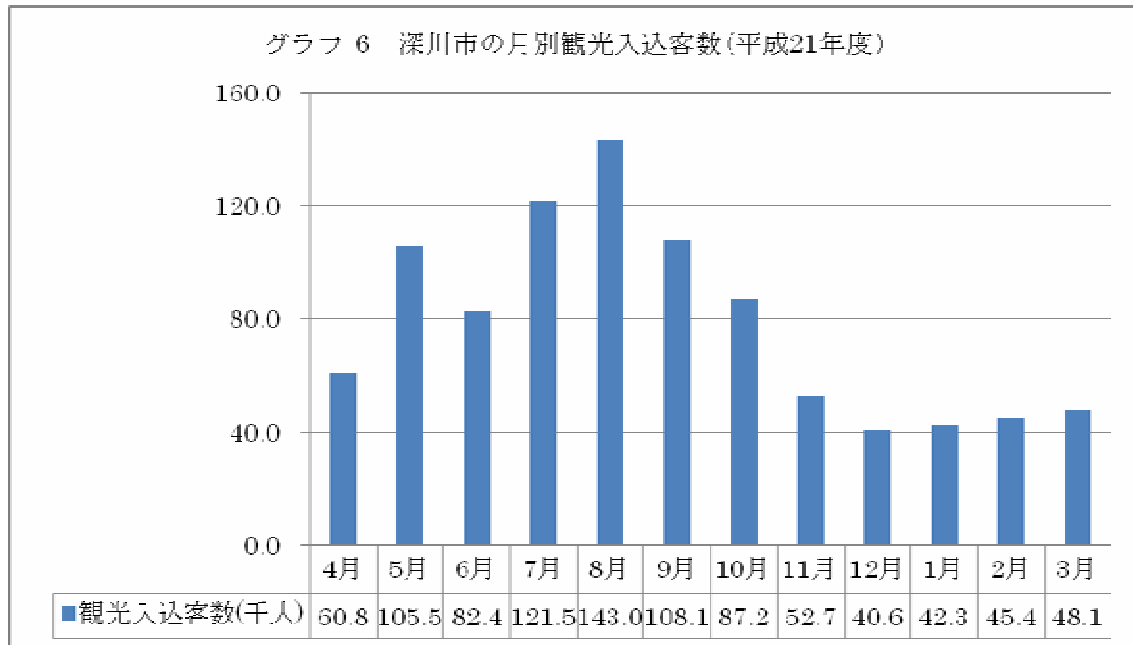
深川市は豊かな自然に恵まれ、様々な農産物が生産される「食材の宝庫」である。中でも、北海道有数の米所として知られ、毎年、きらら 397、ななつぼし、ほしのゆめなどの良質・良味の米が生産されている。山間丘陵地では畑作・果樹・酪農が盛んである。深川市の農業産出額の過半数を米が占め、次点で野菜が続いている。また、野菜はきゅうり、玉ねぎ、ねぎなどの生産が多い。深川市の主な農産物の収穫月を表にまとめたので参照してもらいたい。

深川市の農業も、他の地域と同様に農業従事者の高齢化、若者の農業離れなどの問題を抱えている。この問題に対して深川市は農政課を中心に、農業振興委員会や振興計画を立ちあげるなどして対策を講じている。

表 2 深川市の主な農産物の収穫月	
水稻	9～10 月
小麦	7～8 月
大豆	10 月
ばれいしょ	8～9 月
玉ねぎ	8～9 月
アスパラ	3～9 月
長ねぎ	5～12 月
きゅうり	6～10 月
トマト	6～10 月
りんご	9～10 月

7. 深川市の観光

7.1. 深川市の観光入込客数



出典:北海道庁

深川市の観光入込客数を月別に見てみると、5月と、7月から9月にかけてが特に高くなっている。その理由として、その時期にイベントが多いことが考えられる。5月には「市民桜祭り」や「ふかがわスプリングフェスタ」。7月には「鷹泊湖水祭り」や「まあぶフェスタ」などのイベントが開催される。これらの数多くのイベントがこの時期の多くの観光客を集めていると考えられる。

7.2. 深川市の観光スポット

深川市の観光スポットには、その豊かな自然を活かした公園やキャンプ場が多く、様々な場所で色とり取りの自然と触れ合うことができる。桜山公園では春には「市民桜祭り」が開かれたり、鷹泊自然公園では7月に「鷹泊湖水祭り」が開かれたりと、各地で様々なイベントが開かれている。また、戸外炉畔やイルムケップスカイラインなどの見晴らしの良い場所では、深川市の自然を一望することができる。

深川市ゆかりの書家である小川東洲氏や、画家である松島正幸市の作品を展示するアートホール東洲館を始めとする文化的な観光地も深川市には数多く存在する。深川市開基100年を記念して作られた深川市生きがい文化センターもその一つだ。同所はホール、郷土資料館、図書館、視聴覚室の他、様々な創作活動を行えるようにアトリエや和室などを備え

た複合文化施設である。他にも文化ホール「み・らい」やアグリ工房まあぶなど、芸術的、創作的用途に応えることが出来る施設が多い。

2 月には深川市の気候を活かしたイベントとして「ふかがわ氷雪まつり」が開催される。大雪像と大滑り台をメインに、市民雪像、「まごころ ゆきだるま」や多彩なステージイベントが繰り広げられる。夜には雪像がライトアップされ、幻想的な雰囲気を味わうことができる。深川市の冬を思い切り楽しむことができる冬の一大イベントである。

図 4 深川市生きがい文化センター



出典:深川市 HP

【参照ホームページ】

- ・北海道深川市：<http://tochi.mlit.go.jp/tockok/gis/pdf/hokkaido/04.pdf#search=>
- ・深川市：<http://www.soumu.go.jp/soutsu/kyushu/data/pr/pdf/060403-1-8.PDF>
- ・深川市の木・花・鳥：
http://www.city.fukagawa.hokkaido.jp/reiki_int/reiki_honbun/ar10000041.html
- ・河川整備計画（案）（大鳳川）：
http://www.ishikari.pref.hokkaido.lg.jp/NR/rdonlyres/20B19EAD-42A5-481E-8543-F00D41229183/0/ohok_24.pdf#search=
- ・各県の県章：<http://zenjyuhan.jugem.jp/?eid=3341>
- ・フリー百科事典 Wikipedia：<http://ja.wikipedia.org/wiki/>
- ・深川市 HP：<http://www.city.fukagawa.hokkaido.jp/index.php>
- ・深川市 平成 17 年国勢調査報告書：
http://www.city.fukagawa.hokkaido.jp/web/section/soumu/dl/10312001_1.pdf
- ・農林水産省：<http://www.machimura.maff.go.jp/machi/map2/01-02/228/agriculture.html>
- ・北海道庁：<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/index>